

# 「転がされた墓石 あなたの石はどうなっていますか？」

マルコ 16 : 1~7

## ■ アントニン・ドヴォルザーク

先週、数千キロの距離を移動する電車の中で、いろんな人を見ました。ある人は電車の車窓に張り付くように動画を撮り続け、ある人は電車のタグの番号を撮り満足そうにしていました。電車好きには時刻表を覚えるのが好きな人、電車の音だけを楽しむ人もいます。

作曲家アントニン・ドヴォルザークの作った曲で誰もが知っているイントロ部分。映画に出てくるジョーズが接近するときのイントロ部分ですが、これは実は機関車の音が元だったのです。「遠き山に日は落ちて」も機関車が遠くを走る姿を曲にしたものです。ドヴォルザークが幼い頃から見て愛していた風景や思い、そして慣れ親しんだ機関車の音は彼の生き方の中に、人生に影響を与えるものでした。このように、ある一つの出来事、人生の中で印象付いたことが実は生涯にわたって影響を与えることがあるのです。

日本では人が亡くなることは縁起が悪いとされ、言うてはいけないことのように思っているかもしれません。しかし、私たちは死があるからこそ生き方を考え、生きようとしています。そして、生涯を終えた時に自分の上にある墓石は、あなたの人生を封じてしまうような巨大な重石のように感じるかもしれません。私たちの人生に大きな影響を与え、その中心にあるのは何ですか？自分でしょうか？それとも神様でしょうか？

## ■ マルコ書に描かれた人たち

本来、女性は記述にも残らない時代の中にもありました。しかし、聖書はなぜ彼女たちの感情や思いにまでふれて細かく女性の描写を書き残したのでしょうか？

それは私たちの人生において心の内にある思いを考え、人生を狂わすほどの大きな障害のように思える過去の出来事を誰が取り除けてくれるのかという疑問に対して考えるために重要だったからかもしれません。ただの会話のようなやりとりでさえも、一つ一つの言語や原点を探るならとても意味深いことがわかるのです。聖書には神は $\alpha$ （アルファ=最初）であり $\omega$ （オメガ=最後）であるとあります。この最初と最後を聖書はその物語の中で描いているのです。私たちは小さな出来事のように見えるこの中に描かれた墓石、人生のピリオドをうつ時にすべてを封じてしまおうと見る重石を見て考えなければならないのです。

## ■ 後世に残せるものは勇ましい 高尚な生涯である～故・中村哲氏～

故・中村哲さんは内村鑑三に影響され価値観を持った人の一人でした。人生にとって大切なことは後世に偉業を残すこと、それは内村鑑三が残した言葉でもありました。しかし偉業をなした人がすごいという話ではなく、偉業をなした人が次の世代に繋いだものを私たちがどのように受け継いで、またどうつなぐかということが大切なのです。

中村哲さんは医者として医療活動を行いましたが、戦争が起こる中で医療の働きに限界を感じていました。なぜなら問題は日本人の食料提供が残した負の遺産だったからです。支援し与えることで彼らは働かなくなったのです。そこで中村さんは彼らに仕事を与えてどうやってその町を豊かにするかユーモア（ユーモア=フモーレス=血液）を持って教えました。

生きるとは私たちが喜んで楽しんで誰かのために後世に残る高尚な生涯をたとえ厳しい環境にあっても勇ましく生きることなのかもしれません。中村さんが10年前に始めたことで結果を見るまでどれくらいの反対を受け問題と向き合ったのでしょうか。結果彼は現地で生涯を終えました。しかし多くの人たちはその死を否定的に見てはいません。彼の死を知った多くの人たちの人生の前に、彼がこれだけのことを成し遂げたのだから勇敢であろうと考えたのです。私たちが生きる時に本来自分のあるべき姿を選ぶ時に摂理が重なり人生に奇跡が起こるのかもしれない。

## ■ 理解と共感

・バイオフィジカルモーション

梅干を見れば唾液が出ます。人間のような形を見てサルだとは思いません。男女の見分けもできます。私たちが生きてきた生き方によって共感

するようになっていくのです。

・ハイコンテキスト

私たちは相手の言葉やしぐさのその背後に含まれるたくさんの情報を感ずることができません。感じる手の温もりで心が温かくなるのです。私たちはデジタルではなく、フィジカル（=科学と情報と現実）でありたいのです。必要なのは共感と理解です。

私たちは人生の中で死に向かってたくさん重石を持っています。その重石ゆえに自分の正しい決断ができないでいるのかもしれない。しかし、重石である墓石を誰も取ってくれないと言っているのかもしれない。また誰かを支配し命令して本当のことを見ようとせず理解しようとしていないのかもしれない。しかし聖書はイエス様が人々の底辺に汚れた家畜小屋に生まれ、十字架に架かることで私たちに理解しようとする姿を教えているのです。中村氏の言葉に“人は人のために働いて支え合い、人のために死ぬ。結局はそれ以上でもそれ以下でもない。これは人間の仕事である。仕えることである”とあります。そして聖書が残した平和とは何かそれは理解することです。私たちの重石を墓石を背負い、おろしてくださった方の犠牲の上にいる私たちは悲しみだけで終わらず喜び平安の中で理解し次の世代へと引き継ぐものとなるのです。ある人が悲しみながら蒔いた種は多くの収穫を得、自己中心がゆえにその種の意味を知らない者が残されたものを理解した時にそれはストーリーになるのです。そこに愛があるから私たちは生き方が変えられるのです。

## ■ 見方を変えると生き方は変わる

ある日、ハドソン川に母親を連れられた男性が観光に来ていた。同じ場所には別の多くの観光客も見に来ていました。その日は深い霧で全く景色が見えない状況でしたが老いた母親はそのような状況でも息子にこう話します。「霧の粒子が美しいわね。薄いとこりと濃いとこりがあって。そして川の表面は温度が低くて透き通っているし、美しい景色を見せてくれてありがとう。」母親が話したのは息子への感謝でした。しかし、多くの観光客は「なんと運が悪いんだ。ここまで来て高いお金を払ってきたのに景色が見えない。」と嘆き見方を変えてみることで私たちの生き方はこれほどに違うのです。であれば見方を変えることで私たちの生き方はどれくらい変わるのでしょうか。人間関係が、仕事や家庭が上手くいかないと嘆くのはなぜでしょうか。それは見方の違いなのかもしれません。あなたの右の手は何をしてきたでしょうか？指をさし、誰かを傷つけてはいないでしょうか？イエス様はそんな私たちのためにその手にくぎを刺されました。私たちの足はどう進んできたでしょうか？彼はその足に杭を打たれ私たちの身代わりになったのです。理解し共感する姿です。

## ■ さいごに

「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられぬといは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。（ピリピ 2:6）」私たちは神様の前に出て背負っているものをおろして次の世代に残せる実を結ぶことができます。多くの経験と色んな理解をすべて置いて生き方がどうであったかどんな生き様を後世に残すのかを、どう召されるのかを考えませんか？私たちのために十字架の死にまで従われたイエス様の姿を私たちは知っています。自分を傷つけ自分を無にして犠牲にして生きることではなくユーモアにあふれ喜んでいて。あなたを愛した人を知り、あなたが愛されている存在であることを知りその愛によって愛を分ける人生が喜びの人生です。ものやお金ではなく愛。その愛の生き方は人に示すことができます。神の前に生きる生き方を選ぶ者となれますように。

(要約者:西崎 真由美)

(2023年5月14日)